

訳注『研志堂詩鈔』選（四）

塩見邦彦

（鳥取大学名誉教授・島根大学元教授）

摘要

正牆適處は鳥取城下で文政元年（一八一八）に生をうけ、明治八年（一八七五）に亡くなった武士である。と同時に漢詩人として活躍した人物であり、この時代において傑出した詩人でもある。ここに数回にわたって、彼の詩集『研志堂詩鈔』の選訳及び注釈を試みる。彼は詩人の心と画人の心とをもつて、自然を見たのであつて、結果としてそれが漢詩という世界に結実した。そのために、唐詩・宋詩の作風に学んだことを、実証的に説明する。

キーワード：正牆適處、研志堂詩鈔、幕末、明治、鳥取、漢詩

謁名和公廟

名和公の廟に謁す

隱島風雨接天暗
雲護龍舟渡北溟
驚浪怒濤海氣惡
萬乘此時鴻毛輕
君家兄弟皆忠烈
天子有詔豈偷生
一門多士真男子

隱島の風雨 天に接して暗く
雲は龍舟を護りて 北溟を渡る
驚浪 怒濤 海気悪しく
万乗も此の時 鴻毛よりも軽し
君家の兄弟 皆忠烈
天子に詔あり 豈に生を偷まんや
一門の多士 真の男子

決然立勒勤王兵

船上之山勢崒嶽

巍然忽築百尺城

百尺長城容易起

倒檣爲竿紙爲旌

八公草木助軍勢

一掃東海驅長鯨

回復他日是首勛

鑾輿一朝還舊京

決然として立ちどころに勒（ひ）く 勤王の兵

船上の山 勢 崒嶽す

巍然たり 忽ち築く百尺の城

百尺の長城 容易に起ち

檣を倒して竿となし 紙は旌となる

八公の草木 軍勢を助け

東海を一掃して長鯨を駆る

回復す 他日 是れ首勳たりと

鑾輿 一朝 旧京に還る

前狼後虎交吞噬 前狼後虎 交々 吞噬す
 京畿再震鼙鼓聲 京畿 再び震う 鼙鼓の声
 南狩之駕不復回 南狩の駕は復た回らず
 一天二日天晦冥 一天 二日 天も晦冥
 君死王事亦已矣 君の王事に死せしも亦た已んぬるかな
 青史空傳忠義名 青史 空しく伝う 忠義の名
 山海依然無變改 山海 依然として 変改無く
 人事世態有枯榮 人事 世態 枯榮有り
 邱隴鋤餘僅數尺 邱隴の鋤余 僅に数尺
 古廟無人加葺成 古廟に人の葺成を加うる無し
 不覺階前拜跪久 覺えず 階前に拜跪すること久しく
 空將雙淚濺柴荆 空しく双涙を将（も）つて 柴荆に濺ぐ

【詩題】名和公の廟に参る

【大意】隠岐の島の風雨は天に接して暗く、雲は後醍醐天皇を載せた船を守って北の海を渡った。逆巻く波は海の空気を更に悪くし、後醍醐天皇の命は、この時鴻毛よりも軽いほどであった。名和家の兄弟は皆忠実な烈士で、天皇の詔勅があればどうして死をも恐れよう。名和一門の武士の多くは真の勢いは高く大きく、この山に忽ち百尺の長城を築いたのだ。船上山はその勢いは高く大きく、この山に忽ち百尺の長城を築いたのだ。百尺の長城もたやすく築き、帆柱を壊して旗竿とし、帆の紙で旗を作った。神仙に富む草木も軍勢を助け、東の海を一掃して私欲を貪る悪人を慌てふためかせた。将来お前たちは功績第一となろうとお言葉があつて、天皇の乗った車はある日ついに都に帰った。前門の狼や後門の虎のような輩は次々と襲い掛かり、京都では再び騎

兵の太鼓が音を立てた。一度南に行った車は二度と帰らず、天に二つの太陽（天皇）が並び立ち、天下は真つ暗になった。名和氏が天皇の為に死したとしてもまたやむをえないことであり、歴史書では空しく忠義の士として名前を伝えている。山や川は昔ながらの変化もなくそのままの姿で、人事や世態というものは栄枯盛衰がつきものである。丘は鋤で耕されて残るのは僅に数尺で、名和氏の廟には人が屋根を加える事もない。思わず知らず階段の前で拜跪すること久しく、虚しく涙を流して、公のあばら家にそそぐことしかできなかった。

【語釈】○名和公―名和長年。南北朝時代の武将。元弘三年後醍醐天皇の隠岐脱出を助け、船上山に迎えた。建武の新政で因幡・伯耆の守護。後に足利尊氏と戦って戦死（？―一三三六）。○隠嶋―隠岐の島。○驚浪怒涛―驚濤のこと。逆巻く波。○萬乗―一万の兵車。転じて其の出動し得る広さの土地・君主。また転じて天子の意。○鴻毛―鴻の毛。極めて軽いものの喩え。○勤皇―天皇の為に力を尽くす意。○崒崒―崒崒。高く険しい様。高く大きい様。○巍然―山が高く大きい様。○八公―八人の門客のこと。後に神仙の意味で使用。（『神仙伝』巻四参照）。ここでは、船上山の「船」の異体字「船」のつくりの「公」を意識するか。○草木 三木一草を意識するか。後醍醐天皇の四人の寵臣、結城親光・名和長年・楠木正成・千種忠顕の総称。「ユウ キ」、「ホウ キ」（名和は伯耆守であったことから）、「クスノ キ」、「チクサ」と四人の姓や官職の読みにちなむ。○東海―東の軍勢。○長鯨―貪り飽く事を知らぬ悪人。○鑾輿―天子の乗る車のこと。○一朝―一度。いったん。○吞噬―飲むことと咬むこと。○晦冥―暗いこと。名和氏が天皇の事で死亡したのはやもうえない事であったのだ。○青史―歴史のこと。紙のなかった時代に竹の青皮を火に炙って油を抜き

その上に記録したのでかく言う。○邱隴―「邱」も「隴」も丘の意。
○鋤餘―鋤のあまり。鋤で耕しても残る所。○柴荆―しばやいばら。
転じてあばら家。

雲州鰐淵寺 雲州の鰐淵寺

古松蒼柏逼簷生 古松 蒼柏 簷に逼りて生じ
山壓禪關勢欲傾 山は禪関を圧して勢い傾かんとす
一枕眠醒清徹骨 一枕 眠りより醒め 清骨に徹す
伊尼半夜兩三聲 伊尼 半夜 兩三声

【詩題】 出雲の鰐淵寺

【大意】 古びた松と青々とした柏が軒先まで迫って生え、山はお寺にのしかかって傾きそうな様子に見える。一眠りして眠りから覚めると、清々しい空気が骨にまで染み入り、鹿が夜中に二声三声、声を挙げて鳴く。

【語釈】 ○鰐淵寺―山陰屈指の天台宗の古刹「浮浪山鰐淵寺」のこと。
○禪關―禪法の関門。ここはお寺のこと。○伊尼―鹿のことをこの様に言う（梵語より）。

米城客中贈樋野含齋 米城客中樋野含齋に贈る

醉倒青樽爲猷酬 酔いて青樽を倒し 猷酬をなす
陶然同慰客中愁 陶然として同に慰む 客中の愁い
應追四皓尋芝去 応に四皓を追いて芝を尋ねて去らんとすべし

訳注『研志堂詩鈔』選（四）（塩見邦彦）

好泛五湖携妓遊 好し 五湖に泛べて妓を携えて遊ぶ
籬落雪霜存晚菊 籬落の雪霜 晚菊存し
沙邊風日有閑鷗 沙辺の風日 閑鷗有り
憐君世外機心遠 憐れむ 君の世外 機心遠きを
萬頃煙波一釣舟 万頃の煙波 一釣舟

【詩題】 米子の旅館で樋野含齋に贈る

【大意】 酔って酒だるを倒し互いに盃を交わす。気持ちよく酔って旅の愁いを慰める。あの中国の四皓を追いかけて芝を尋ねて去るのにちがいない。さあ五湖に船を浮かべ妓を連れて遊ぼう。まがきの傍に霜や雪を堪えた菊があり、沙辺に風のある日は暇な鷗がいるのだから。浮世の煩わしい事で、策略を巡らすこともない君を羨ましく思う。見渡す限りの霧の中に一艘の釣り船。

【語釈】 ○米城―米子のこと。○樋野含齋―広瀬藩士（？）一八六五）。海野紫瀾・篠崎小竹に学び、晩年、米子や淀江に郷校を開く。名は弘。字は子毅。通称は多門。別号に松窓。横山耐雪著『出雲詩綜』巻四に詩一首を載す。○四皓―西漢の時代、高祖に仕える事を潔しとせずに商山に隠れ住んだ四人の老人のこと。東園公・夏黄公・甬里先生・綺里季の四人。○五湖―中国古代江南の五つの湖のこと。越王句践に仕えた軍師范蠡は隠遁して五湖に船を浮かべたという。○籬落―籬牆。「唯有數叢菊、新開籬落間」（白居易詩）。○沙鷗―浜辺の鷗。○世外―浮世の煩わしさから超然としてのこと。○機心―機械之心。策略を巡らす心。○一釣舟―「獨釣寒江雪」（柳宗元詩）を意識するか。

同含齋老人遊看松堂 含齋老人と同(とも)に看松堂に遊ぶ

謝屐阮筇同出門 謝屐 阮筇 同(とも)に門を出ず
 看松堂上倚松軒 看松堂上 松軒に倚る
 農遲収稲因年歉 農は稲を収めるに遅きは年歉に因る
 山未脱楓知節暄 山は未だ楓を脱せず 節暄を知る
 霜氣滿園醒鶴夢 霜氣 滿園 鶴夢を醒まし
 茶聲一鼎喚詩魂 茶声 一鼎 詩魂を喚ぶ
 歸程猶剩斜陽影 歸程 猶お剩す 斜陽の影
 隱暎茅簷三兩村 隱暎す 茅簷 三兩村

【詩題】含齋老人と共に看松堂に遊んで

【大意】謝靈運の下駄に阮籍の杖で共に門を出た。看松堂のほとりで松でできた手すりに寄りかかる。稲を刈り取るのが遅いのは穀物が十分実らないため、山はまだ楓が残っているのは時候はまだ暖かいからであろう。それ程紅葉が進んでいない。霜を催す気配が園に満ち、鶴が見る夢も醒め、お茶を入れるための湯が沸いた音が詩を作る心を呼び覚ます。帰郷の日程はまだ少し残っているが陽も西に傾き、陰になつたり陽が当たつたりするあば屋が二三軒点在している。

【語釈】○看松堂―不詳。○謝屐―謝靈運が山に登るときに履いた下駄。○阮筇―阮籍がついたという杖。○年歉―その年が不作であること。○歎歳。○隱暎―隱英。陰になつたり輝いたり。○節暄―「節」は時節。「暄」は温かさ。○茅簷―茅檐。かやぶきの家の軒。転じて茅屋。あばら家。

過弓濱宿大江某村居次含齋老人韻

弓浜を過ぎ大江某の村居に宿り、含齋老人の韻に次す

幾叢霜菊著殘花 幾叢の霜菊 殘花を着け
 頼及夕陽猶未斜 頼(さいわい)に 夕陽は猶お未だ斜ならざるに
 及ぶ
 欲駐吟筇投一宿 吟筇を駐めんとして一宿に投ぜんことを欲す
 竹籬茅屋故人 竹籬 茅屋 故人の家

【詩題】弓ヶ浜を過ぎ大江何某の村居に宿り、含齋老人に次韻す

【大意】幾群れかの霜に撃たれた菊が殘花を付け、幸運にも夕陽はまだ落ちていない時間に間に合った。杖を投じて一晚の宿を借りようとする。それは竹の籬に囲まれたあばら家の、昔なじみの友人の家。

【語釈】○弓浜―現在の弓ヶ浜。米子市。○故人―古なじみの人。友人。

題偷閑螢雪樓 偷閑螢雪樓に題す

主人耽讀撥多忙 主人は耽読し 多忙を撥し
 幾卷詩書獨對床 幾卷の詩書 独り床に対す
 照得盤山四時雪 照らし得たり盤山四時の雪
 何勞夜學聚螢雪 何ぞ勞して 夜学 螢雪を聚めん

【詩題】偷閑螢雪樓に題して

【大意】多忙な仕事を振り払って、樓の主人は書物にふけり、何巻か

の書物だけがベッドに対して積み上げてある。わだかまる様な山を照らして一日中降る雪。この様な状態では夜学問をするのに螢のような雪を集める必要はないであろう。

【語釈】○偷聞螢雪樓―不詳。○耽讀―書物にふけり読むこと。○盤山―「盤」は「蟠」に同じ。「わだかまる」○四時―一日中の四つの時。朝・昼・夕・夜。○螢雪―晋の車胤が螢を集めてその光で書を読み、孫康は雪の明りで書を読んだという故事。「螢窓雪案」(『蒙求』)参照のこと。

勝田社、佐佐木嘉蔭、招余飲、手間山、近在巽位、真園中物也、主人乞余記之、按古事記、八十神、怨大國主神、欲殺之、至伯耆國手間山下、燒巨石、自山上投之、大國主觸之死、而體皆糜爛、有神取蜃與蛤、合而塗之、遂蘇云、伯之海、今猶產蜃、其色赤、俗呼曰赤貝、此日供赤貝羹、結落、故及之、

勝田社に佐々木嘉蔭 余を招き飲す。手間山は近く巽の位に在り。真に園中の物なり。主人余に乞いて之を記せしむ。按ずるに古事記に、八十神、大國主神を怨み、之を殺さんと欲す。伯耆の國手間山下に至り、巨石を焼き、山上より之に投ず。大國主之に触れて死す。而して體皆糜爛す。神ありて蜃と蛤を取りて、合して大國主の尊に塗る。遂に蘇る。伯の海、今猶お蜃を産す。其の色赤く、俗に呼びて赤貝と云う。此の日赤貝の羹を供す。結落故に之に及ぶ。

把酒殷勤論往事 酒を把りて 殷勤に往事を論ず
手間山色手杯中 手間山の色 手杯の中

訳注『研志堂詩鈔』選(四)(塩見邦彦)

蒼茫萬古留神迹 蒼茫たり 萬古 神迹を留め
蜃貝猶餘焦石紅 蜃貝 猶お余す 焦石の紅

【詩題】勝田神社で佐々木嘉蔭が私を招いてくれ飲んだ。手間山が近く巽の方向に在る。まことに園中のものの様だ。主人は私に願って此のことを記さしめた。考えてみると、『古事記』に八十の神が大國主尊を憎み彼を殺そうとした。伯耆の國の手間山下に到り、巨石を焼き山上より彼に投げつけた。大國主の尊はこの石に触れて亡くなった。そして體は皆ポロポロにただれた。神があり蜃と蛤を取って合わせて尊に塗ると遂によりみがえつたのだ。伯耆の海には現在でも猶お蜃を産出する。その色は赤く俗に呼んで「赤貝」という。此の日、赤貝の羹を供せられた。それ故、結句でこのことに話が及んだのだ。

【大意】盃を取りながら大いに昔を論じ、手間山の色は杯中に映っている。山は見渡す限り青々と広く永遠に神の迹を留めていて、赤貝は今でも焦げた石の赤味を残している。

【語釈】○殷勤―懇懇。懇ろ。丁寧。親切。深く。○手間―手間山のこと。鳥取県西伯郡会見町寺内の南、西伯町との境に有り、標高は三二九m。東麓に赤猪岩(あかいわ)神社、西麓に古代水分信仰の跡である清水井がある。要害山、岩坪山、峰松山等の呼称がある。○萬古―萬古。永遠、永久の意。○焦石―焦げた石。

東坡先生笠屐圖 東坡先生笠屐圖

笠屐飄然倚杖枝 笠屐 飄然として 杖枝に倚る
松村竹落步遲遲 松村 竹落 步遅遅たり

六九

請看蓮燭歸來晚 請うて看よ 蓮燭 帰り来ること晚きは
輸此蠻煙瘴雨時 此の蛮煙瘴雨の時に輸(しゅ)するを

【詩題】東坡先生(蘇軾)の笠屐図について

【大意】笠と鞋をはいて飄然と杖に寄りかかり、松の林や竹の村落を
歩く歩みはゆつくりしている。御覧なさい。豪華な蓮型の手燭で宴会
から夜遅く意気揚々と帰って来るような絵は、この蘇東坡の左遷され
た南の果てで、瘴気に満ちた靄や雨に濡れそぼった時の姿のすばらし
さにはとても及ばない。

【語釈】○東坡先生笠屐図―東坡は蘇軾のこと。「東坡笠屐図」は死後
多く描かれ、石にも彫られている。代表は『施注蘇詩』四十二卷(康
熙三十八年刊) 版本の挿絵。この書は宋代版本の残欠を補い、編集し
なおしたもの。○蓮燭―蓮の形をした手燭。○蛮煙瘴雨―南地にはや
る悪性の風土病。林語堂氏によれば蘇軾の死は「アミーバ赤痢」で病
没という。

望船上山有感南帝北巡之事

船上山を望みて南帝北巡の事に感
ずること有り

元弘天歩属難難

元弘の天歩は難難に属し

龍駕倉皇出九關

龍駕は倉皇として 九関を出づ

越国孤臣餘一范

越国の孤臣 一范を余し(備後三郎 備後の三郎
なり)

平原太守憶雙顔

平原の太守 双顔を憶う(名和諸族 名和の諸族
なり)

皇車跡斷荒村裏

皇車の跡は断ゆ 荒村の裏(車尾村、土豪深田某、

蔵宸翰歌什、庭中有榎樹、車駕臨幸繫此樹云、今
猶存古株、村名蓋因之 車尾村の土豪、深田某、
宸翰歌什を蔵す。庭中に榎の樹有り、車駕臨幸
此の樹に繫ぐと云う。今猶お古株存す。村名は蓋
し之に因る)

御厩名傳古驛間

御厩の名は伝う 古驛の間(御厩驛、古之名和港

也、帝自隱岐國潜幸、御舟始達於此 御厩驛は
古の名和港なり。帝 隱岐の国より潜幸し御舟始
めて此に達す)

船獄依然青不改

船獄 依然として青を改めず

北溟遥對隱岐山

北溟 遥かに対す 隱岐の山

【詩題】船上山を望み見て南帝北巡のことに感じて

【大意】元弘三年の天運すなわち天子の御旅行は難儀な事であった。
後醍醐天皇を載せた籠はあたふたと九関をでた。備後の三郎は越の国
の孤臣である范蠡一人が残ったようなものであり(備後三郎=児島高
徳のことである)、名和長年の一族については、平原の太守たる二人
の「顔」(顔真卿・顔杲卿)が思い出される(名和の諸族の事である)。
現在は天皇の車の迹も消え荒れ果てた村があるのみ(車尾村の土豪深
田某の家には宸翰の歌を蔵している。庭には榎の木があり天皇が車で
見えた時にはこの樹に繫いだそうだ。今もなお古い株がある。思う
に村名はこの樹に依っている)。「御厩」(みくりや)という名前だけ
が 古い駅の名として残る。(御厩驛は古の名和港である。帝は隱岐
の国から潜幸し、帝の乗った舟は初めてここに至った)船上山はあの

時と同じように変わらずに青々と生い茂り、北の海を見ればはるか彼方に隠岐の島が見える。

【語釈】○船上山―鳥取県中西部。元弘三年隠岐から帰る後醍醐天皇を迎え、名和長年が挙兵した所。○天歩―天運に同じ。○艱難―悩み、難儀。○龍駕―龍車。天子の乗る車。○越国―ここでは南の「備後」をそういった。○備後三郎―児島高德。後醍醐天皇隠岐遠流の際、院庄（現岡山県津島市）で奪還を試みたが断念。桜の木に「天勾踐を空しうすること莫れ、時に范蠡の無きにしも非ず」の句を刻み付けた。○双顔―安史の乱で顔真卿・顔杲卿のことであるが、ここでは名和の諸公のこと。○北溟―北海に同じ。

冬夜即事 冬夜 即事

破雲蟾影不成圓 雲を破る 蟾影 円を成さず
飛霰有聲驚懶眠 飛霰 声有り 惰眠を驚ろかす
満盞凍膏燈鎮膠 満盞の凍膏 灯は鎮（つね）に膠（にかわ）し
寒花落盡夜茫然 寒花落尽して 夜茫然

【詩題】冬の夜の情景

【大意】雲間から見える月は、丸い姿すべては見せず、霰が音を立てて飛びかうので物憂い眠りを驚かせる。皿になみなみと注がれた凍った油はいつもかたまり、寒々とした灯花が落ち尽くして夜はほんやりとしたままだ。

【語釈】○蟾影―月影のこと。○燈鎮膠―灯芯がいつもかたまること。○茫然―ほんやりとした様。

訳注『研志堂詩鈔』選（四）（塩見邦彦）

冬至 冬至

今日方冬至 今日 方に冬至
十年猶轉蓬 十年 猶お転蓬
一陽已來復 一陽 已に來復
半世幾窮通 半世 幾たびか窮通
凍硯留餘墨 凍硯は 余墨を留め
寒爐撥剩紅 寒爐は 剩紅を撥す
正知春意動 正に知る 春意動き
梅氣滿筠筒 梅氣 筠筒に満つるを

【詩題】冬至の日に

【大意】今日は丁度冬至の日。私はと言えばこの十年間放浪の身であった。冬至には陰が極まり陽が再び巡り来る日。此の半生の間、幾度か困る事と栄達があった。凍った硯にはまだ墨が残り、寒々とした爐には残り火をつつく。この日、春の気配が動き始め、竹の筒に梅の気が満ちるのを感じる。

【語釈】○転蓬―蓬が風に吹かれて転んでいくような定めない生活を送ること。中国の砂漠に自生する蓬の生態を人生にたとえた。漂泊。流浪。「転蓬離本根」（曹植詩）。○窮通―苦しむ事と立身出世する事。窮達ともいう。「窮達各有命」（白居易詩）。○筠筒―竹の筒。竹で作った花瓶のこと。

除夜米城旅寓作 除夜米城旅寓の作

此間人海沸喧瀾 此の間 人海 喧瀾に沸く

客裏無他世事牽 客裏 他の世事の牽無し

殘曆今宵駭駒隙 殘曆は今宵 駒隙に駭ろき

異郷十歳尚蟬連 異郷 十歳 尚お蟬連

街頭燈火迎春市 街頭の灯火 春市を迎え

村外雞聲欲曉天 村外の雞聲 曉天ならんとす

詩債年年猶未了 詩債は年々 猶お未だ了らず

孤衾獨伴一釭眠 孤衾 独り 一釭を伴いて眠るを

【詩題】除夜に米子城下の旅館にて作る

【大意】この間、人の多い所では喧しく騒ぎ立てることが続いた。しかし、旅の中では世間の俗事に牽かれることもない。残す所僅かの暦を見て月日の立つのが早いことに驚き、他郷で十年もの間まだその状態が続いている。街の灯火で春市がめぐり来たことを知り、村の郊外の鶏の鳴き声に夜明けの近いことがわかる。詩債は毎年積もったまままだまだ終わらないが、たった一つの布団で灯と共に眠るのだ。

【語釈】○世事―世間の俗事。○駒隙―月日が早く過ぎ去ることをいう。人の一生は白馬が壁の隙間を通り過ぎるぐらい短いものだ、という例え(『莊子』知北遊)。○蟬連―蟬聯。物事が蟬の鳴声のように続くことをいう。○街頭―この「頭」は「石頭・骨頭・墻頭」等と同じ意味のない接尾詞。意味は「街」。○詩債―詩の負債。詩を求められたまま、まだ作らずにいる事。「負君詩債多」(白居易詩)。○孤衾―一つの寝具。

辛亥元旦 辛亥の元旦

客居無事絶來賓 客居に事なく 來賓絶え

起坐先遙拜老親 起坐し先ず遙かに老親に拝す

漸積馬齡知世味 漸く馬齡を積みて世味を知り

恰迎雞日是生辰 恰も雞日を迎えて是れ生辰

五風十雨時應洽 五風十雨 時に応に洽(うるお)うべし

二首六身春已新 二首六身 春已に新し

災厄頻年奈民歎 災厄 頻年 民の歎を奈(いかん)せん

懇思他問喘牛人 懇ろに思う 他の喘牛を問う人を

(余以元旦五晝生、去年庚戌、大風洪水并至、米價騰揚、山陰山陽諸国殊甚、前年己酉、亦風雨多傷穀、詩中故及之。余元旦五晝を以って生る。去年の庚戌、大風洪水並びに至り、米價騰揚す。山陰山陽の諸国殊に甚だし。前年の己酉、亦風雨多く穀を傷む。詩中故に之に及ぶ)

【詩題】辛亥(一八五〇)の元旦

【大意】元日生まれの私は何事もなく他国に寄寓しているが來客もない。起きだして最初にするにはるか遠くの両親に拝跪すること。ようやく馬齡を重ねて世間の人情を知り、雞の日を迎えてまるで誕生日の様だ。氣候が温順なように太平な世の中で、(辛)亥の春になり已に新しい年を迎えた。ここ数年、災厄が続き人々の飢饉をどうしたらよいのだろう。心から願うことは、喘牛について尋ねる様な人があらわれることだ。(私は一月五日の誕生で、去年の庚戌(一八五〇)の年には大風や洪水が一緒に来て米価は高騰し、山陰・山陽の諸国は特にひどかった。その前の己酉(一八四九)の年も又風雨多く穀物を傷

めた。故に詩中でそのことに触れている。

【語釈】○辛亥—嘉永四年（二八五二）。○五風十雨—五日一風十日一雨の略。氣候の温順なことを言う。また、太平の象徴としても使用。宋代以来の口語。「五風十雨天時好」（王炎詩）。「十雨五風歳豊穰」（陸游詩）。「十雨五風」とも言う。○二首六身—二つの頭と六つの身。「亥」字を分析すると、上が二画、下が六画なのでそのように言う。『春秋左氏傳』襄公三十年参照。○歉—貧しい。飢饉。○喘牛—前漢の丞相丙吉は、喘ぐ牛に注目して、農業に関わる天候に変動がないかを把握したという（漢書丙吉伝）。

春寒 春寒し

春浅橋頭短柳眉 春浅く 橋頭 柳眉短く
寒残梅外澁鶯舌 寒さは残り 梅外 鶯の舌澁し
欲倩村童摘淡芹 村童に倩（たの）みて 淡芹を摘まんとし
満籃香泥半是雪 満籃の香泥 半ばは是れ雪

【詩題】春でもなお寒い

【大意】春は浅く橋のふもとの柳の芽はまだ伸びていないし、寒さの中で残る梅のむこうには鶯の鳴き声も澁りがち。村の子供たちにたのんで川芹を取ってもらうのだが、籠に満つ香り高い芹の半分は雪のような白さだ。

【語釈】○香泥—文字通りは「香りの泥」だが、ここは芹の泥を指しているであろう。

詠櫻 桜を詠む

海棠是蜀牡丹洛 海棠は是れ蜀 牡丹は洛
偽紫僭紅交屈強 偽紫 僭紅 交ごも屈強
一系綿綿千萬古 一系 綿綿として 千万古
誰知東海有花王 誰か知らん 東海に花王有るを

【詩題】桜について

【大意】海棠の産地は中国の蜀（四川省）だし、牡丹ときたら洛陽だ。この二つの花は偽紫と僭紅のくせにどちらも威張っている。一つの純粹な系統が面々と千万年も続いているのは、なんと東海（の日本）にこの花の王たる桜があるということを知っているだろうか。

【語釈】○偽紫—似紫。江戸期に流行した色。「僭紅」は「浅紅」か。牡丹の有名な品種「魏紫姚黄」や、論語の「紫の朱を奪うを悪む」を意識した表現。○花王—この詩では桜のこと。ただし中国では「花王」と言えば「牡丹」をいう。

春郊偶成 春郊偶成

杖錢連日弄韶華 杖錢 連日 韶華を弄し
踏遍南村與北涯 踏遍す 南村と北涯とを
寺露塔肩松萬樹 寺は塔肩を露わし 松は万樹
石支橋腹水三叉 石は橋腹を支え 水三叉
雨餘芳艸歸牛路 雨余 芳草 歸牛の路
柳外青帘賣酒家 柳外 青帘 酒を売る家

不妨輕風吹醉面 妨げず輕風 醉面を吹くを
爛紅相映暮山霞 爛紅相映ず 暮山の霞

【詩題】春の郊外で偶々できた詩

【大意】酒代は若さにまかせ毎日のように使い、村の南から北の果てまで歩き回った。寺は塔の薨を見せ松の木は巨木、おおきな石が橋の中ほどを支え、その下を三俣に川が流れている。雨上がり、花の香る草、家路を急ぐ牛。柳の木の外には青い幟の酒屋がある。酔っぱらいの顔に軽やかな風が吹きつけるのに身を任せる。夕暮れの山の霞の中心でさらさらと輝く太陽が照り映えている。

【語釈】○杖錢―杖の先に括り付けた錢。多く酒代に使う。○韶華―春の美しい景色、また青年時代を言う。○爛紅―鮮やかな赤。輝くような赤。太陽を言うのであろう。

二月十有一日發米城將至備中

二月十有一日 米城を發し將に備中に至らんとす

孤客海城阻風雪 孤客 海城 風雪に阻まれ
雄志十句歎隔絶 雄志 十句 隔絶を歎く
待得陽和物皆春 陽和を待ち得て 物皆な春めき
勃然一起螻初伸 勃然として一たび起きれば 螻初めて伸ぶ
紫溟玄海路有幾 紫溟の玄海 路幾くばくかあらん
往將踏破蜻蜒尾 往きて將に踏破せんとす蜻蜒の尾
先向山陽試芒鞋 先に山陽に向かい芒鞋を試みる
滿山餘雪入黃薇 滿山の余雪 黃薇に入る

【詩題】二月十一日、米子を出発して備中に到達しようとして

【大意】(私という)ひとりの旅人が海で風雪に阻まれ、百日もの間旅に出るといふ雄志を抱いていたがそれもかなわない。春になるのを待っていたが、物全てが春めき、たちまち尺取り虫のように一屈一伸していたのがしゃんと身を伸ばした。ほの暗い玄界灘まで道はどのくらいあるだろう。行きて踏破せんとする日本国の尾に当る九州西端の地。先ずは山陽に向かい草鞋(での旅)を試みよう。山一杯に残る雪に芽吹いたわらびの中に踏み込んでいく。

【語釈】○十句―「句」は十日の事。○勃然―たちまち。俄かに。○螻―尺取り虫。一屈一伸して進む。○蜻蜒―トンボ。蜻蛉とも表記する。「蜻蛉」を「アキツ」と読み、それ故「日本の国」をいう。○芒鞋―草鞋。ワラジ。○黃薇―わらび。

訪足羽良齋留寓數日賦謝

足羽良齋を訪ね留寓數日、賦して謝す

已歷三分野 已に歴す 三分の野
行過二部村 行き過ぐ 二部の村
負擔休我足 負擔に我が足を休め
剥啄叩君門 剥啄して君が門を叩く
殘雪庭留跡 殘雪は庭に跡を留め
餘醺酒滿樽 餘醺は酒 樽に満つ
愧無酬厚意 愧ず 厚意に酬ゆるなきを
醉墨引狂痕 醉墨に狂痕を引けり

【詩題】 足場良齋を訪ね数日逗留して詩を作り感謝した詩

【大意】 今まで三部の原野をめぐってきた。また、二部の村も通り過ぎた。多い荷物を抱えていて、しばらく足を休めるため、とんとんと君の門を叩く。残りの雪が庭に跡を留め、芳しい酒の香りが樽に満ちている。君の厚意にどう報いたらいいのか恥じ入るばかりだ。せめてもと酔った勢いで気ままな筆でも揮おう。

【語釈】 ○足羽良齋―鳥取藩医。現伯耆町の人。溝口郷校を開く。○三分―地名。鳥取県伯耆町三部。○二部―三部の南にある宿場町。戦国時代足羽氏の城があった。○剥啄―剥剥啄啄の略。人の足音または戸を叩く音。○狂痕―気ままな筆迹。

玉島客舎餘霞樓所望 玉島客舎の余暇樓の望む所

江樓雨後碧連空 江樓 雨後 碧空に連なり
落日滿簾花亦紅 落日簾に満ちて 花も亦紅し
隔水讚山青一髮 水を隔て 讚山 青一髮
模糊半在暮煙中 模糊たり 半ば暮煙の中に在り

【詩題】 玉島の旅館の「余霞樓」からの眺望

【大意】 水辺の余霞樓では雨が上がりて碧の空に連なり、落日が簾一杯に満ち、花もまた紅色である。海を隔てて讚岐の山が一筋のように見えるが、それはしかしほんやりと半分暮れなずむ靄（もや）の中に隠れている。

【語釈】 ○玉島―岡山県倉敷市。海に臨む漁港。○余暇樓―不詳。○所望―望み。願い。○青一髮―蘇軾の「青山一髮是中原」（澄邁駅

通潮閣）及び頼山陽の「水天髣髴青一髮」（泊天草洋）の句を下敷きにして「青山一髮是讚山」を言い換えたもの。

寓中原国華枕碧樓 中原国華の枕碧樓に寓す

主人留客意相親 主人は客を留め 意相い親しむ
教我頓忘羈旅情 我をして頓に羈旅の情を忘れしむ
況此清明好時節 況や此の清明の好時節
幾朝占斷滿樓春 幾朝 占断す 滿樓の春

【詩題】 中原国華の「枕碧樓」に寄寓した時の作

【大意】 主人は私を留め、心から親しくしてくれた。私には旅の疲れを急に忘れさせるほどであった。ましてこの好き清明節の時節。何日間、樓に満ちる春を一人だけで楽しんだことであろう。

【語釈】 ○中原国華―不明。○清明―清明節のこと。春分の後、四月五日ごろ。

笠岡訪小寺雲崖 笠岡に小寺雲崖を訪ぬ

春雨秋霜鬢欲絲 春雨 秋霜 鬢 絲ならんとし
浮雲滄海寄相思 浮雲 滄海 相思を寄す
與君同話經年別 君と同（とも）に話す 經年の別れ
一點青燈剪盡時 一点の青灯剪り尽す時

【詩題】 笠岡に小寺雲崖を訪ねて

【大意】春の雨、秋の霜を重ねて、髪は白い糸のようになろうとしている私は、浮雲や青海原を見てはあなたの事を思いだす。君と一緒に話すのは幾年も経過した別れの年月。青白い炎の灯花を切り落としてなくなるまで話し込んだことだ。

【語釈】○笠岡—岡山県の南西端にある地名。西国航路の寄港地として発展した。○小寺雲崖—不明。笠岡の学者、教育者で、有名な国学者小寺清先、清之父子の縁者か。○經年—幾年も経過すること。

惜春 春を惜む

寧耐閑愁感物催	寧ぞ耐えん	閑愁	物に感じて催し
春場芳事總將灰	春場	芳事	総て将に灰にならんとするに
半宵踈雨花零落	半宵の踈雨	花	零落（こぼれお）ち
去歳荒巢燕認來	去歳の荒巢	燕	認め來る
旅況十年憐短髮	旅況	十年	短髮を憐れみ
風光一別付殘杯	風光	一別	殘杯に付す
他郷羞我長爲客	他郷に羞ず	我が長えに客と爲り、	
欲駐青君挽不回	青君を駐めんと欲して挽くも回らず		

【詩題】春を惜しんで

【大意】静かな悲しみは物に感じてつゆのり、春の庭に良き事柄が全て灰燼に帰すようなことがあることにどうして堪える事ができようか。夜半のバラバラと降る雨に花も落ちこぼれて、去年の荒れ果てた巢をみつつけて今年も燕が帰ってきた。流浪の旅はここに十年を数え短くなつた髪を悲しみ、故郷の風景は分かれて後、ほとんどなくなつた酒

杯に託して、思い出す。よその土地で恥ずかしく思うのは自分は長く旅人を続けているが、春を留めようとして引きとめても返すことができないことだ。

【語釈】○踈雨—疎雨。まばらな雨。「北山踈雨點朝衣」（岑參詩）。○短髮—短い髪の毛。○青君—「春」の事。

伊豫途上憩中山茶亭 伊予の途上、中山茶亭に憩う

溪山四月雨如麻	溪山の四月	雨麻の如し
布穀聲聲綠更加	布穀	声声 緑更に加う
翠柳樹邊呼渡客	翠柳の樹邊	渡を呼ぶの客
紫藤花下賣茶家	紫藤の花下	茶を売る家
生孫園竹猶留籜	孫を生ず園竹	猶お籜を留め
引水秧田半養蛙	水を引く秧田	半ば蛙を養う
地僻春光終未去	地僻にして春光	終に未だ去らず
殘櫻處處尚開花	殘桜 處處に	尚お開花す

【詩題】伊予への途上、山中の茶店で憩つた時の作

【大意】谷沿いの山の四月は雨が麻のように降り、カッコウの鳴き声で緑が一層鮮やかだ。翠なす柳の樹のあたりで渡しを呼ぶ客もいれば、藤の花陰で茶を売る店もある。孫を生む竹林の竹はまだ皮が残っており、水を引き入れている水田は、半分は蛙の鳴き声を聞くために蛙を養っているようなものだ。土地柄は辺鄙な所故まだ春が終わっていないようで、残んの桜が至る所に咲いている。

【語釈】○布穀—鳴鳩の一名。ふふ鳥。キツツキ・カッコウ等。○籜

―竹の皮。○秩田―苗の植わった田。

〔付記〕

このたびも島根大学要木純一教授に多くのご指摘をいただいた。紙面を借りて心より感謝を申し上げます。

Kenshido's Selected Poems (4)

SHIOMI Kunihiko

(Professor Emeritus, Tottori University · Former Professor, Shimane University)

[Abstract]

Tekisho Shogaki a.k.a Kenshido (1818-1875) was a poet who lived through the last fifty years of Edo era and early Meiji era. He was Tottori han domain clan. His Poems were published in Bunkyo 1 year (1861). Kenshido poems have the characteristics of regional poetry and also have the characteristics of the late Edo era.

Keywords: Tekisho Shogaki, latter term of Edo era, poem